

『こどものとも』に表れた性差 3

— きょうだい関係 —

武田京子*

(2001年1月9日受理)

Kyoko TAKEDA

A Gender Gap in "KODOMONOTOMO" 3

月刊物語絵本『こどものとも』創刊号から526号を資料とし、絵本の中に表現されたきょうだい関係について分析考察した。

心理学等のきょうだい関係の研究結果と同様、二人きょうだい関係が定着するにつれて、兄に対して専制を認め姉には母親の代役を求める考え方が消失し、性差にかかわらず年長のきょうだいに養育者・保護者的役割を求めるようになってきていることがわかった。

[キーワード] 月刊絵本、きょうだい、少子化、二人きょうだい

1. はじめに

1956年に創刊され現在まで毎月発行されている『こどものとも』を分析資料に用い、絵本がジェンダー・アイデンティティの形成との関連を考察している。テキスト及びイラスト担当者・主人公の性差¹⁾、性別役割分業²⁾に視点を置いて考察した結果については、既に報告済みである。

本稿では、きょうだい関係に着目し、わが国のきょうだい関係の研究結果を参照しながら、『こどものとも』創刊から528号までに表現されたきょうだい関係について分析考察を行った。

月刊予約絵本『こどものとも』の性格および歴史について既に報告済みである³⁾。

2. 家庭内のきょうだいににかかわる状況の変化

第2次世界大戦終結直後のベビーブームに4.32(1949)を示した合計特殊出生率は漸減し、

* 岩手大学教育学部家政科

1.38(1998)までになっている。少子化の要因としては、栄養の改善、医療公衆衛生の発達によって、乳幼児死亡率が低下し、ほとんどの子どもが成人まで育つことが保証され、「子どもは少なく産んで大切に育てる」という考え方が普及したことが考えられる。

1997年の「国民生活基礎調査」によれば、子どものいる世帯は全世帯の30%であり、子どものいる世帯の平均児童数は1.77人となっている。子どものいない夫婦や一人っ子夫婦は少数であるが、初婚年齢の高い妻ほど出産児数は少なく、子どものいない夫婦の割合は若干増加している。

「第11回出生動向基本調査」によると1997年の結婚持続期間15～19年の夫婦の平均出生児数の内訳は、子無し世帯3.7%、子ども一人世帯19.8%、二人世帯53.6%、三人世帯27.9%、四人以上世帯5.0%で、平均出生児数は2.21人である。戦後の第一次ベビーブーム後、「少産少死」が定着するときょうだい数は2人が最も多くなってきている。

家族内の人間関係には親子関係ときょうだい関係の2種類ある。1人の子どもから発する人間関係通路の数は二人きょうだいの場合3、三人きょうだいの場合4であるが、家族関係の種類はそれぞれ、6（きょうだい関係の種類は1）、10（きょうだい関係の種類は3）である。人数では一人の違いであるが、直接・間接に経験する人間関係は量及び質共に大きく異なってくる。

核家族化の進行ときょうだい数の減少は家族間の人間関係を単純にし、濃密化をもたらした。このことは、「他人との良好な人間関係をつくる能力が過去に比べると低くなっている。」という解釈もできる。2～4歳しか差のない二人きょうだい関係の場合、親子関係とは違った友達関係に近いものであるが、少ないながらも年齢差があることから、依田は、きょうだい関係を「親子関係のようなタテの人間関係と友達関係のヨコの人間関係が同時に存在するナナメの人間関係」と呼んでいる。きょうだい関係の中で自己主張をしたり、自己抑制をしながら、競争や協力する経験が積み重ねた子ども達は友達をつくりやすいが、一人っ子は友達を作りにくいと述べている⁹⁾。

3. 児童心理学分野におけるきょうだい関係の変化

心理学では、従来、家族の人間関係の中では親子、特に母子関係に着目した研究に重きが置かれていた。家族内のもうひとつの人間関係であるきょうだい関係については、養育態度と呼ばれる、親の目から見たきょうだい関係の研究が中心であったが、きょうだいの関係そのものに焦点化した研究も行われるようになってきている。中西は過去のきょうだい関係に視点を置いた心理学研究の経緯をまとめているが⁹⁾、ジェンダーときょうだい関係のかかわりで従来の研究を集約すると、以下の2点にまとめられる。

①きょうだいの出生順位と性格、親の養育態度

依田を中心とした1962年、1980年の調査及び岩井らの研究がある。子どもの性格形成の要因の一つとして、出生順位が重視され1960年代から研究が行われてきた。日本の家族制度の中に顕著に見られた「長幼の序」「男子優位」の伝統的価値観によって、親はきょうだい間に役割期待を持っていた。その役割期待から生じた出生順位固有の性格として、長子は、自制的、慎重、控えめ、親切だが面倒なことを嫌う傾向があり、次子は活動的、快

活であるが、おしゃべり、甘ったれ、強情、依存的でやきもちやきを挙げる事が出来る。また、親は長子に次子以下の成長のモデルとなること、時には日常的な世話をする、「親代わり」の役割期待を持つ（依田ら1963,1981）。姉がいる男子は「父親母親からも大事にされている」と認知し、兄のいる女子は「母親からあまり大事にされていない」と認知している（森下1991）報告からは、特に姉に対しての「親代わり」の役割期待が強いことがわかる。

二人きょうだいの性別の組み合わせによって分類し調査した結果では、兄妹・姉弟の異性のきょうだいの女子に性格特性がはっきりすることが見いだされている。（岩井1992）

②きょうだい間の人間関係の受け取り方

依田はきょうだい関係を、対立関係（相互に対立し、張り合っている関係）、調和関係（仲の良い関係）、専制関係（どちらかが優位に立っている関係）、分離関係（積極的な交渉が認められない関係）の4タイプに分けている。1965年と1981年の調査を比較すると、1965年の調査では、きょうだい関係の40%が対立関係であったのに対して、1981年の調査では調和関係が41%と最も多くなり、対立関係、専制関係は減少している。また、分離関係は14%から26%へと上昇している。きょうだいの対立が見られなくなると同時に、積極的な交渉も見られなくなってきた。これは、伝統的な家族制度の崩壊による家族内の人間関係の民主化によって、きょうだいの性別構成や出生順位による差が無くなり、男子が女子の持つ特徴に近づいたと言える。

きょうだいの組み合わせ別で見てみると、兄弟間には対立、姉妹間には調和、兄妹間には兄の専制、姉弟間には調和と分離の二つの関係が見られる。また、姉が弟の優位を認めるケースもあるとしている（依田1965）。相互に張り合う関係は男女とも年齢の上昇によって増加するが、調和を図る関係は女子のみ増加する（福田1986）。二人きょうだいの親和度の度合いは、姉妹間に高く、兄妹間に低い（詫摩1981）。

4. 『こどものとも』にみられるきょうだい関係

前回と同様に出版形式及び女性の社会進出を視点に以下の3期に分け、きょうだい関係の描かれ方、きょうだいへの親の役割期待について考察した。

- ①Ⅰ期（1～156号）（1956. 4～1969. 3）『かがくのとも』が分離するまで、テキスト・イラストレーション共に男性作者が多く、主人公も男性が多い。特に『かがくにとも』分離直前の3年間には科学及び社会に関するテーマが多く取り上げられている。
- ②Ⅱ期（157～360号）（1969. 3～1986. 3）わが国が高齢化社会を迎えた1970年及び「国連婦人の10年」を含む期間。女性の社会進出が進み、女性の寿命の伸びが注目された。テキスト作者は、女性優位のちに均衡になった。女性主人公が徐々に増加し、個性的な女性主人公が登場した。
- ③Ⅲ期（361号～528号）（1986. 4～2000. 3）テキスト作者は女性優位、イラスト作者は男女均衡になった。パターン化した男らしさ女らしさではなく、

性にとらわれない個性を持つ主人公がそれぞれの性で描かれている。

①Ⅰ期：「子どもを産むなら二人」という考え方が定着した。憲法改正（1947）によって家庭内の民主化が始まり、それまでの、男尊女卑、家父長制、長子相続の身分的な序列性は表面的に無くなった。当時のきょうだい関係調査の結果からは、親は「男らしさ・女らしさ」を期待し、それぞれに期待（容認）される性格としては、兄：指導性、姉：落ち着いている・世話好き、弟：きびきびしている、妹：協調性である、と報告されている。

きょうだいの人間関係そのものをテーマにした作品はないが、きょうだい描かれているのは16冊（10.3%）である。作品の中に強調されるのは、姉役割である。「ひとりのできるよ」（12）、「もりのむしたち」（17）には、弟が一人では出来ないことを手伝ったり、暖かく見守る姉の姿が描かれ、母親代わりの保護者的な役割を期待している。兄については保護者や指導者の役割を期待していないのは、兄妹、兄弟関係で兄は年少者を対等な遊び相手とはとらえていない（専制）ところからも明確である。「そりにのって」（69）は兄がしているそりあそびの仲間に入れてもらえない主人公（妹）が、自分のそりをおじいちゃんにつくって貰い手に入れる話である。「とんだトロップ」（84）では、一方的に兄をライバル視する弟が描かれている。

②Ⅱ期：心理学的研究では、きょうだい関係の年代的な変化検討が行われ、性差が少なくなったと報告された。

きょうだいが登場する作品は15冊（7.4%）である。きょうだいの人間関係そのものをテーマにした作品がつけられた。

姉妹関係の「ちいさなみちこちゃん」（193）は幼稚園での実話をもとに、妹の視点から姉の生活へのあこがれを描いている。幼稚園に通う姉を追って主人公は幼稚園にやってくるが、姉には受け入れられず、他の友達には受け入れられる。筒井・林ペアは姉妹関係（親和）を姉の視点から描いた作品をつくっている。「はじめてのおつかい」（240）乳児の妹のための牛乳を買いに行く（写真1-1, 1-2）、「あさえとちいさいもうと」（278）母親の留守中

写真1 「はじめてのおつかい」



1-1 表紙



1-2 裏表紙

に昼寝をしていた妹が目覚め、外で一緒に遊んでいる内に見失う。あちこち探し回ったあげく、公園の砂場で遊んでいるところを見つけ抱き上げる（写真2-1, 2-2）。「いもうとのに

写真2 「あさえとちいさいもうと」



2-1 表紙



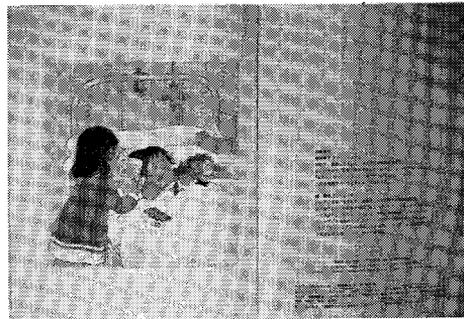
2-2 後扉

母親の役割をとる姉

写真3 「いもうとのにゅういん」



3-1 表紙



3-2 P30~31

「いもうとのにゅういん」(323)では、盲腸になった妹が入院し、姉は一人で夜半遅く父親が帰ってくるまで心細く過ごし、お見舞いに自分の大事にしていた人形をあげる、という自己犠牲を払う(写真3-1, 3-2)様子が描かれる。母親の代理役として、買い物や子どもの世話をを行うときの子どもの不安感、妹の入院によって、姉としての成長をする主人公を描いているが、姉役割は日常生活で買い物を頼まれる、留守番をするというお手伝いを通じて自然に身に付いたものから、入院という事件をきっかけに納得して受け入れるものというように描き方が変化した。

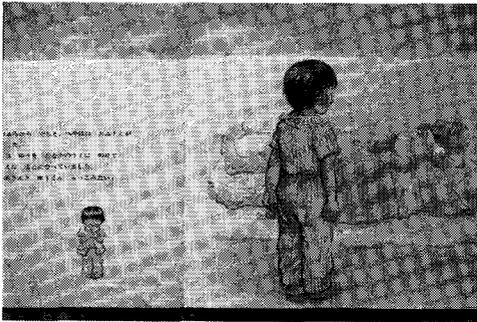
兄弟関係については、おにいさんのおさがりを嫌う対立関係を描いた、弟が主人公の「だぶだぶ」(170)以外は、兄を主人公にした親和関係や協力関係が描かれた。赤ちゃん(性別不明)が生まれることによって兄としての地位が与えられる「おおきなおみやげ」(174)では、主人公は母親に甘える事の出来る友達をうらやましく思っている。お母さんが赤ちゃんを連れて帰ってくるところで話は終わるが、兄役割を自覚し受け入れるところまでは描かれていない。「とりかえっこする」(255)の兄弟はテキストでは「あかちゃんズボン」と表現される、つりズボン(弟)とベルト付きズボン(兄)を交換したことによって地位も交換する。弟は兄の存在をうらやましく思っていたが、弟になった兄が池に落ちるのを見て、助けに飛んでいき、兄への理解を深める(親和関係)。「てっちゃんけんちゃんとうきだるま」(297)は、兄弟で協力して雪だるま(敵)に立ち向かう話である(協力関係)。

今まで描かれることの無かった兄妹関係がはじめて登場するのは、二人きょうだい定着し異性のきょうだい関係が目立つようになったためと考えられる。「こうさぎのクリスマス」(249)は、両親はきつねに追いかけられたまま帰ってこない。今夜はクリスマスなのにサンタクロースも自分たちの家にはきてくれないかもしれない兄妹は、お互いに手作りのプレゼントを用意する(親和関係)。「なににのっていこうかな」(313)では、前日、いじめっこにいじめられたことにこだわって登園を渋る主人公は、いろいろな乗り物に乗って登園することを考えている。母親に「うばぐるまにのってミルクをのんでいったらい」といわれ「ひとりでいくよ」といったとき、昨日いじめた友人が迎えに来る。主人公のプライドが妹の存在によって支えられる様子が描かれている。

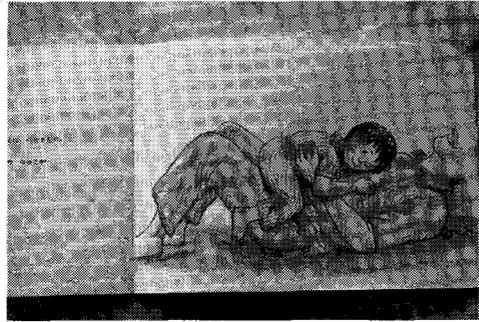
③Ⅲ期：きょうだい関係が描かれた作品は23冊(13.7%)。作品の中では、きょうだい関係の男女差はさらになくなり、養育者のな役割が兄にも与えられるようになった。

姉弟関係は、これまでは母親代わりとして、保護者や養育者としての姉を描くことが多かったが、「おやすみなおちゃん」(457)では姉という地位を受け入れ難く赤ちゃんに返りたいと思う主人公を描く。両親はその心情を理解し、ガマンさせたり背伸びをさせるのではなく、一緒に遊び世話をする(写真4-1, 4-2)。姉弟妹関係「ひめねずみのみーま」(483)

写真4 「おやすみなおちゃん」



4-1 P22~23
妹の誕生という葛藤



4-2 P24~25
主人公の気持ちを受容する父親

「ふくねずみ すごろくばなし」(430)、姉弟関係「クリスマスのちいさなはなし」(525)はきょうだい関係の葛藤が主題ではないため、特に地位・役割を強調してはいない。

兄妹関係では「チャマコとみつあみのうま」(368)は、馬に乗りたい気持ちが果たせないで、妹や他の動物を馬に見立てる兄(専制関係)だが、この時期全体を見ると例外である。それに対して、これまで見られなかった妹や弟を思いやる兄が登場する。「ぼくのふね」(410)では兄にもお手伝いの役を与え、兄は、弟や妹と一緒に遊び危険から護るよう頼まれるが、うまく出来ず両親から叱られる。「けんけん」(439)では兄妹関係は主題ではないが二人で遊んでいるところでストーリーが展開する。兄妹関係では、他にある。兄が大切にしている絵の具を許しを得た後で妹が使い、塗りたくった様な絵をかき上げる。兄はビックリはするものの怒ったりけんかになったりせずそのまま受け入れる、「まほうのえのぐ」(445)、仲良く遊ぶ兄妹「やまがみさまのゆきがっせん」(490)「ころころいけは

「ぼちゃんいけ」(504)がある。「あかちゃんがやってきた」(511)は、「おおきなおみやげ」(Ⅱ期174)と同じ次子と誕生を待つというテーマであるが、親は積極的にきょうだいを受け入れさせようと働きかけ、年長の子への自立の願いが感じられる作品である。さらに「ちよろりととっけー」(368)では、活々ながらの弟の世話をする兄を描いている(写

写真5 「ちよろりととっけー」



5-1 表紙



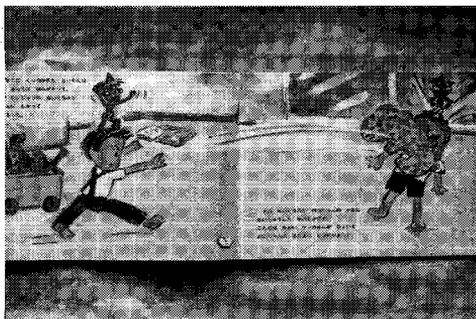
保護者役割をとる兄

5-2 P8

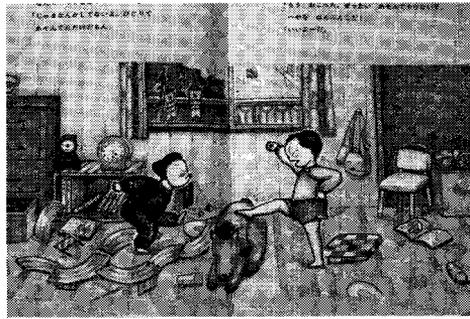
真5-1,5-2)。「こころのぼんば」(416)は山姥にとらえられた兄を妹が助けに行く対等な関係が描かれる。

しかし、兄弟では依然として対立関係が描かれる。「たけし」(411)「ケンカオニ」(481)は、ずばりけんかがテーマで、「(男の)子どもはけんかをしながら大きくなる」ことが容

写真6



6-1 「ケンカオニ」P3~4



6-2 「たけし」P14~15

「けんか」を容認される兄弟

認されている(写真6-1,6-2)。これに対して、姉妹の対立関係はテーマに描かれることはない。母親代わりの姉が描かれなくなり保護者的な兄が登場してきたが、きょうだいの人間関係内で自己主張をする姉はまだ見られない。

5. おわりに

きょうだい関係における伝統的序列性と価値観は、戦後の民主化の進行に伴い、対立関

係の減少と専制関係の減少，調和関係と分離関係の増加が進み，性別構成や出生順位による差が無くなったと言われている。『こどものとも』に登場するきょうだい関係にも反映し，性差による役割期待は弱まり，年長者の役割として期待される傾向が見られる。

引用文献

- 1) 武田京子『『こどものとも』に表れた性差』岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要 第9号 (1999)
- 2) 武田京子『『こどものとも』に表れた性差2』岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要 第10号 (2000)
- 3) 前出1)
- 4) 依田 明『きょうだい関係の研究』大日本図書 (1990)
- 5) 中西由里『きょうだい』『児童心理学の進歩1993 (vol. 32)』金子書房 (1993)

表：引用した『こどものとも』の作品リスト

号数	発行年月	作 品 名	テキスト	イラスト
12	1957.3	ひとりのできるよ	小林純一	岩崎ちひろ
17	1957.8	もりのむしたち	三芳梯吉	三芳梯吉
69	1961.12	そりにのって	神沢利子	丸木俊子
84	1963.3	とんだトロップ	小野かおる	小野かおる
170	1970.5	だぶだぶ	なかのひろたか	なかのひろたか
174	1970.9	おおきなおみやげ	松野正子	吉本隆子
193	1972.4	ちいさいみちこちゃん	なかがわえりこ	やまわきゆりこ
240	1976.3	はじめてのおつかい	筒井頼子	林明子
249	1976.12	こうさぎのクリスマス	松野正子	荻太郎
255	1977.6	とりかえっこする	いぬいとみこ	大友康夫
278	1979.5	あさえとちいさいもうと	筒井頼子	林明子
297	1980.12	てっちゃんけんちゃんとゆきだるま	おくやまたえこ	おくやまたえこ
313	1982.4	なににのっていこうかな	角野栄子	津田櫓冬
323	1983.2	いもうとのにゆういん	筒井頼子	林明子
368	1986.11	チャマコとみつあみのうま	竹田鎮三郎	竹田鎮三郎
411	1990.6	たけし	中西恵子	中西恵子
414	1990.9	ちょろりんととっけー	降矢なな	降矢なな
416	1990.11	ころろのぼんば	長谷川摂子	井上越子
439	1992.9	けんけん	山村輝夫	山村輝夫
445	1993.4	まほうのえのぐ	林明子	林明子
457	1993.4	あやすみなおちゃん	安江リエ	垂石眞子
481	1996.4	ケンカオニ	富安陽子	西巻茅子
490	1997.1	やまがみさまのゆきがっせん	山村輝夫	山村輝夫
504	1998.3	ころころいけはぼちゃんいけ	あまんきみこ	上野紀子
511	1998.1	あかちゃんがやってきた	角野栄子	はたこうしろう